

てこな・ミュージック・ジャーナル

本当にあった悲恋から
生まれたオペラ 椿姫

■ 原作＜椿姫＞の作家は誰？

オペラ・ファンに人気の高いヴェルディの(3幕)オペラ＜椿姫＞は、1853年3月6日にヴェネツィアのフェニーチェ劇場で初演されました。台本はピアール・ヴェーで、原作はデュマ・フィスの小説『椿姫』です。原作が実在の悲恋に基づいた小説だと知ると、このオペラへの興味もいっそう深まるのではないのでしょうか。

■ 絶世の美女 マリ・デュプレシー

時は19世紀半ばのパリ。文化芸術は爛熟し、劇場に、評判のサロンに、舞踏会に、パーティーにと、ありあまるほどの財産の世襲貴族と成り上がり資産家たちの家紋付馬車が次々に横付けされました。最新流行のファッションを見せつけるように着飾った人々が降り立ち、あくびをかみ殺しながら、長い夜を華やかなシャンデリアのもとで過ごしていました。

市川市文化振興財団 文化芸術専門員 小坂 裕子

とくに若者の心を蝕んでいたのが、何をしても面白くない「世紀病」と呼ばれるもので、退廃的な気分は一時しのぎの馬鹿騒ぎで発散するしかありません。そんな中の一人が＜椿姫＞の原作者デュマ・フィスです。『三銃士』や『モンテ・クリスト伯』で当代一の流行作家である父を持ち、その精力的な仕事振りが反映されたかのような女性関係の結果としての私生児。その生い立ちに気持ちをますます屈折させて、受け継いだ文学的才能を生かすでもなく、無為な日々を送っていたのです。

ところが、そんな日常を一変させる出来事が待ち受けていました。ある日高級ブティックの前を通りかかると、馬車から気品ある陶磁器を思わせる肌の美しい人形のような女性が降りてきたのです。「高級娼婦」マリ・デュプレシーで、パリ中にその名を知られていました。マリを恋人とした貴族の名は枚挙にいとまがなく、パリ最高の芸術家文人が、その傍らにいつも寄り添っていました。劇場の最高の栈敷席に座っては、その美しさとその艶かしさに、居並ぶ観客は舞台よりもマリの方に注目してしまうほどでした。

マリに出会ってしまったことで、“放蕩息子”デュマの人生は大きく変わっていきます。(次回に続く)